大伴旅人研究
――讃酒歌を中心に――

森田　寧子

大伴旅人は万葉第三期を代表する歌人の一人である。その作歌時期は主に大宰帥として筑紫に赴任してからが多く、晩年になってその歌才を発揮した人物である。旅人は大宰府で山上憶良らと共にいわゆる筑紫歌壇を形成し、数多くの歌を残した。中国文学にも精通し、『懐風藻』に詩一編を残している。『万葉集』巻三に収められている讃酒歌群は集中でも酒自体を讃美するという珍しい歌群である。本稿では集中の他の酒の歌と当該歌群を比較することによって、その特殊性を確認するとともに、旅人にとっての「酒」の世界について論じた。

結論として讃酒歌群はただ漫然と漢詩世界を和歌に採り入れた作品ではなく、漢籍を下敷きにしながらも、万葉歌人旅人の独自の酒の世界を和歌によって表した作品だと考えた。漢詩では竹林の七賢に代表される「賢」なる人は酒を飲む。しかし、讃酒歌では一般に「賢」なる人は酒を飲まないものとして歌われている。この「賢」なる人の相違は、旅人が漢詩の「文人」の世界を、和歌の世界にそのまま持ち込むのではなく、自己の「賢しら」像にとらえなおして表現したからだと考える。今一つの相違が「酔ひ泣き」という表現の詠出である。文人たちは酒を飲んでも、決して、酔った上に泣いたりしていない。旅人は「賢しら」に対置する酒を飲む人の「酔ひ泣き」という表現で漢籍にはない旅人独自の和歌世界を詠み出だしたと考えた。

修士論文題目

万葉集の和歌表現
――天平期の「古」と文芸――

金子　絵美

一部を本誌第十二号（H16・3）に掲載
一部を『中京国文学』第二十四号（H17・3）に掲載